

書評

類まれな、近現代医学の 歴史教科書としても優れた書

泉 孝英(編)

【評者】 早石 修

大阪バイオサイエンス研究所 名誉所長

『日本近現代医学人名事典【1868-2011】』

本書は、1868(明治元)年3月に明治政府が欧米医学を公式に採用して以来、2011(平成23)年末までに物故された医療関係者で、特にわが国の医学・医療の発展に貢献された3762人を選んで、物語風に記録されたユニークな人名事典であります。何分にも膨大な内容であり、私自身、生化学という限られた基礎医学が専攻分野なので、医学・医療全体の問題を議論したり、評価することには必ずしも適任ではありません。それでもまず本書を通読して、最も重要な“人選”が極めて公正で妥当であるという印象を受けました。

次に個々の記載について、個人的に親しかった方々について詳しく調べました。いずれも概ね正確な情報に基づいており、しかも専門的な記述以外に本人の性格、趣味、交際、家族など私的な紹介も多く、読物としても興味深いものでした。以下、幾人かを収載人物の例として挙げます(敬称略)。

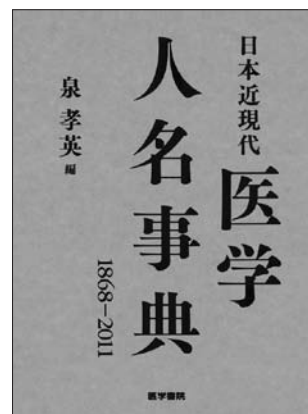
古武弥四郎(本書253ページ)は、「わが国の生化学の開祖」荒木寅三郎(25ページ)の門下で、「わが国の生化学の基礎を築いた」人物です(私にとってはティーチャーというよりメンターと言うべき方でした)。その講義は極めて難解であったため、学生時代の私は医化学の道を諦め、「わが国におけるウイルス研究の先駆者」谷口腆二(393ページ)の業室研究生にいただきました。卒後、軍医として出征し、終戦後に破壊された大阪の惨状の中に戻って臨床医になるか迷った時、改めて基礎医学の道を勧めてくれたのが谷口と、後述する父でした。その後、阪大微生物病研究所(微研)を経て渡米し、アメリカ国立健康研究所(NIH)部長となった私を、京都大学で医化学講座第3代教授・内野仙治(92ページ)の後任人事が難航した折、当時の医学部長・平沢興(514ページ)が異例の決断をされ、招聘された縁がありました。

1909年の「世界で最初の内因性睡眠物質の発見者」石森国臣(53ページ)は、同時期にアンリ・ピエロンが、ほぼ同じアイデアによる実験から類似の結果を出してフランスで発表し、欧米で著名になったのに対し、日本語雑誌で発表した石森は、世界的には無名の

まま近年に至っていたわけです。2009年にはその発見100周年を祝して、私が記念講演をさせていただきました。1つ残念なのは、石森は生理学者であり、その当時の有機化学者との共同研究をされなかったため物質の同定がされていないことでした。1世紀後の私は、「視床下部温度感受性ニューロンを発見」された優秀な生理学者の中山昭雄(450ページ)と共同実験を行うことによって、プロスタグランジンD2の睡眠誘起作用を生理学の立場からも確認することができました。

驚いたのは、わが父早石実藏(496ページ)が収載されたことです。父は祖母1人に育てられ18歳で医師免許を取得、臨床医としても研究者としても大変優れた人で、8歳年下の妻光子と共に満95歳の長命で亡くなりましたが、最後まで最新の英文医学誌に目を通す勉強家でした。編者の泉孝英博士による解説を週刊医学界新聞(第3008号【寄稿】近代医学の145年)で拝見して、父のように在野で過ごしたため、医学の正史からは忘れられた無名人をも顕彰する趣旨があったことに感銘を受けました。加えて、収載人物それぞれの医学・医療に対する貢献を第三者にもわかりやすく解説されるために、膨大な参考文献、資料、年表などを別添されていることも、本書の付加価値を大きく高めています。

本書は、日本はおろか海外にも類まれな、ユニークな近現代医学の歴史教科書としても極めて優れたものであり、編者のライフ・ワークとして高く評価されるべきものと信じます。



A5 頁810 2012年
定価 12,600円(本体 12,000円+税5%)
ISBN978-4-260-00589-0 医学書院刊